

INTERVIEW

一関市国民健康保険藤沢病院 管理者
佐藤元美先生



地域を変える,自分を変える!

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

自治医大卒業生が県立病院を支える

山田隆司(聞き手) 今日は一関市国民健康保険藤沢病院に管理者の佐藤元美先生を訪ねました。先生は自治医科大学の2期生で、長くこの地域を守ってきたことは多くの読者の皆さんが知っておられると思いますが、まずは先生の経歴からご紹介いただけますか。

佐藤元美 私は昭和54年に自治医大を卒業し、初期研修は岩手県立宮古病院で受けました。そこには6年間いましたが、当時の副院長(後に院長になられました)がとてもできる方で、その下でとても勉強になりました。

山田 何床くらいの病院だったのですか。

佐藤 350床くらいでしたが、結核病床も含まれていました。それに対して医師は18~19人でした。

山田 1期生はいたのですか。

佐藤 3人揃っていました。1期生とわれわれが1日中病院の中を走り回って、内科は何でも診るという感じでしたね。多い時は1人で30床くらい持っていましたし。

でも自分たちがイノベーションを担ってできたのでよかったですね。超音波やCT、血管造影、ERCPも導入しました。超音波は6年間で2万件診ました。

山田 すごいですね。超音波が出始めたころですよ。

佐藤 動く超音波が出たころです。それまでは動いていない超音波でしたから。若い人には分からないだろうけど(笑)。

それで100例以上肝細胞癌を見つけて、そのうち10例ぐらいを国立がんセンターで手術してもらいました。血管造影は岩手医科大学の先生が来て教えてくれたり、気管支鏡も外科の先生から教わりました。大学で勉強した時に比べて自分たちの病院が遅れていて、でも自分たちが頑張れば何とかなることは何だろうな、と考えながら6年間やっていました。また、私がついた先生は解剖学の先生だったので、6年間の間に100体、剖検をしました。

山田 なかなか研修病院でもそんなには経験しないですよ。それは先生が特別にそうだったのですか？ それとも卒業生はみんな同じようにやったのですか？

佐藤 ボスがそうだったからなのですが、嫌で参加しない人もいました。でも私は面白くてしかたなかったですよ。だって今日やった解剖で得た知識が明日の気管支鏡に役に立つのですから。

そうしている中で頑張らなくてはどういう例を経験しました。50~60歳くらいで黄疸で亡くなった人がいたのですが、亡くなった後に解剖をしたところ総胆管に2gくらいの癌が見つかったのです。転移なしで、きちんと診断がついて根治術ができていれば治ったかもしれなかったのです。それからPTCDなども一生懸命勉強して治療できるようになろうと頑張りました。忙しかったけど面白かったですね。

山田 臨床のトレーニングとしては、ダイナミックにできたのですね。

佐藤 そこに6年間いて大体内科については診られるようになり、義務があと3年間残っているという時に、岩手県立久慈病院へ行ってほしいという話になりました。そこには外科や泌尿器科には遠藤秀彦先生ほか卒業生の先生が何人かい



一関市国民健康保険藤沢病院

らっしゃいました。内科は消化器のことは消化器内科に任せて、私はペースメーカーを入れたりなど他のことをしていたのですが、3年経ったところに地元の大学から循環器の先生が3人来たので、私は主に呼吸器をやるようになりました。

山田 誰もやらないところを先生が担当したわけですね。

佐藤 そうです。その後地元の大学から私の下に呼吸器の先生が1人ついて、検査の日にはさらに1人大学から来てくれようになったので、呼吸器も複数体制になり、気管支鏡も数多くやりました。肺癌や肺気腫の診断は岩手県で一番例数が多かったですね。外科も充実して、救急車も全部断らずに受けるようになり、ほとんどのことは院内でやれるようになりました。経営もどんどんよくなっていきました。

山田 自治医大の卒業生がチームになって県立病院を支えたのですね。

佐藤 それが今の岩手県の、県立病院の卒業生に対する信頼の第一歩だったと思います。